

傍に立ち給ふ石佛に、道しるべに、町の角にころがつて居る石塔に、幾百年の古が残されて居り、幾多の歴史が秘められて居る。そしてそれは従来の學界からは輕視され看却されて居つたものであつた。著者がそれに注目し、それを拾ひ上げて學問の領域にまで、高揚せんとする努力は大きい。その點に敬意を拂ふ。(霜判、二六二頁、圖版八四、昭和十四年一月、京都ス、カケ出版部發行、定價四圓五十錢)(中村直勝)

金峯山經塚遺物の研究

石田茂作・矢島恭介共著

吉野山の南に聳える山上獄を中心とする大峯連峯は金峯山と總稱され、その名は萬葉集や靈異記に見え、後世傳へて役行者の開く處とされてゐる。しかし山伏修験の道場としての信仰が熾烈となつたのは、平安朝中葉以降のことであつて、今日なほ白衣の行者の讀經奉賽するものが尠くない。かゝる特殊な信仰にたつた金峯山の奉賽物にはまた特殊なものが多く、其等の調査は引いては往時の金峯山信仰を具體的にするものである。さいはひ、元祿四年に寛弘四年銘の道長經筒が発見されたのを初めとして、江戸時代から大正へかけて夥しい遺品が発見された。今回、石田、矢島兩氏が、博物館に一括して藏される大正十一年の出土品を中心とし、廣く方々へ散逸した遺品を蒐め、こゝに金峯山出土品の綜合的研究を完成されたは洵に學界の慶事であり、深く兩氏の勞を多とせねばならぬのである。

さて遺物の出土状態は大正十一年以外には知るよしもないが、其等から歸納すると、出土遺物の殆ど全部は山上獄の頂上にある山上本堂の南方の邊から湧出岩へ至る小丘から発見されたと推定される。遺跡の性質は出土品に經筒、經箱、銅板經、寫經の存する事から一應經塚と思考されるが、たゞ一般經塚と趣きを異にする事から一應經塚と推定されるが、たゞ一般經塚と趣きを異にする事から一應經塚と推定される。總數五十個以上の經筒が存し、然も其の年代は一括遺物であるにも拘らず、紀年銘より推せば寛弘四年より建長三年に及んでゐるのである。されば本遺跡は或一定時を限つた營造ではなく、長期に亘り遂次埋納された所謂複合經塚であると推理せしめる。加之其の出土品中に多數の神佛像があつて、約三分之二の量を占めてゐる點で、また一般經塚とは大いに異つてゐる。そして此等の神佛像中には他の出土品に認められぬ火中の形跡も見られるから、最初、金剛藏王に奉賽された神佛像が火災の爲に破損し、半ば廢棄の意味で埋められたものが多いとの解釋は聽くべきであらう。

次に此等の遺物をば著者は七類に分けて述べられてゐる。經箱は何れも銅製で、五口存する。中でも金銀唐草毛彫經箱の如きは花鳥唐草の精巧なる文様を彫鏤し、その間隙に魚子を打ち、金具鎌子等にもそれ／＼文様を刻してあり、洵に藤原時代工藝の代表的作品と稱するに足る傑作である。經筒は破片からみて五十個程存する。道長經筒の被蓋を初め、銅鑄製のもの、銅板打製あるひは鍍金のもの等、多様を極め、時代は藤原時代から鎌倉時代に及んでゐる。寫經には保存良好のものが尠からず、全部紺紙金泥經であつて、紙本墨書紙を缺くことが注目される。經卷は主として

法華經、無量義經、觀普賢經、彌勒成佛經であつた。銅板經は殘缺三枚、破片若干存し、法華經が刻出され、中には卷頭に見返繪を附したのものもある。而して銅板經は排行の上から推して、もと抄本の體裁であつたと斷定されてゐる。神佛像は永年土中のため破損せるもの多いが、此等は丸彫像、透彫像、薄肉像、毛彫像の四種に大別でき、圖像からみると二百九十九個のうち、藏玉權現像が百八十六個、男女神像がこれに次いで六十二個といつた割合である。總じて安置形式の神佛像が振はず、薄肉彫や鏡面毛彫が壓倒的な事實は、其等が單なる奉養物として奉獻された證左と謂はねばならない。而して如上の神佛像に加へられた圖像的考察また周到である。次に出土の鏡は毛彫あるもの三十面を合はせると百十六面に達する。全體的には圓形有文の普通和鏡が過半を占めてゐる。その他、陶磁器破片、佛具、古錢、劍身、金燈籠殘片等々が發見されてゐる。以上遺物の記述に於いて著者が實物の細心な觀察から種々の重要な新事實を明かにされた點の多いのは本書の價値を高からしめるものである。

さて遺物の上に最も著しい藤原道長及び師通と金峯山との關係は如何。道長は寛弘四年八月二日京都を出立し、十一日山上に祈請し、十四日歸落したが、この事は周知の様に御堂關白日記や榮華物語に最も詳しい。而して其の際埋納した經筒の銘文に據れば彼は寫經埋納の功德によつて極樂に行き、彌勒出世の刹には極樂から還つて法筵に連り、更に成佛したいと三段の願ひをこめてゐる。然らばかゝる信仰を藏玉權現に結びつけた意圖は奈邊にある

か。一般には中宮彰子の皇子誕生を祈つたと言はれる。併し銘文にも明記してある如く、金峯山埋納の念願は十年前の三十三歳の時に起したものである。三十三歳も四十二歳も厄年である。故に道長の目的は寧ろ厄除に懸かつてゐたと考定されよう。師通また藏玉を希求すること篤く、兩度入峯してゐる。前回の寛治二年の願文に據ると、この善行によつて彼は長壽を祈り、子孫を願ひ、除厄を請うてゐることが分かるのである。併しかうした納經並びに御影奉獻の信仰も藤原時代を頂上として以後次第に衰へたらし、この事實は遺物に於いて藤原時代のものが最も多く、鎌倉時代以降のもの、漸く少いことから理想されるのである。

以上は本書の概要であるが、銅板經の復元考定、神佛像の圖像的考察、或ひは道長の埋納等には手堅い考證と鋭い卓見が表れてゐる。たゞ『天平地寶』でも言及したことであるが、もし本書に前人の勞作を註記してあつたならば、著者の努力の跡も判然として、錦土更に華を添へたことであらう。なほ本書には百十六葉のコロタイプ圖版と九十頁の圖版解説が添へられてをり、研究報告書としての價値を完備ならしめてゐる。(有筈判、本文八二頁、帝室博物館發行、定價拾八圓)(角田文衛)

近畿地方古墳墓の調査 二二

——日本古文化研究所報告第九——

梅原末治著

著者梅原助教が日本古文化研究所の一事業として、古代本邦中

櫃の重要古墳の再吟味の意味から、多くの入々の協力を求めて、其の外形の實測、内部構造の調査、各部の正確なる觀察を試み、以つて本邦古墳墓研究の基礎たるべき資料を得んと調査を開始されたのは昭和九年であつた。爾來昭和十年に第一回、昭和十二年に第二回、昨年末に今回の報告を公にし、通計三十一基の重要古墳の報告が鬱然と集積されるに至つた。本回の報告に収録されたのは近畿に於いて五基、岡山縣下で四基であつて、左記の古墳である。

- 一、大和赤阪天王山古墳
- 二、山城飯岡トツカ古墳
- 三、山城飯岡車塚古墳
- 四、播津池田町茶臼山古墳
- 五、備前和氣郡鶴山丸山古墳
- 六、備前新庄天神山古墳
- 七、備中千足裝飾古墳
- 八、美作鄉村觀音山古墳
- 九、山城太秦巨石古墳

本報告は元來大きな繼續事業の結果の一つであるから、今面の調査から一の歸結を求めるが如きは無理なことであるが、然も九基の古墳を通觀すれば自ら解明される所が少くないのである。例へば巨大な横穴式石室が封土の基邊に下底を置いてゐて、墳形の上邊に位置し、墳丘が地山を利用したと認められる事實の如き

また前方部が後圓部に較べて低く、且つ前の開きが多くない前方後圓墳の主體に、豎穴式石室と推定されるものゝ外に、太秦例の様に巨大な横穴式石室の存するものや、或ひは千足裝飾古墳の様に別に粘土槨の並存するものがあることや、もは前方後圓墳の發達を考定する上に緊要である事實の如きは、闡明された一二の例である。就中、注目すべきは鶴山丸山古墳から、漢盛時から六朝初期へかけての鏡背文を有する仿製品が十七面發見されたことである。其れに關連して著者が、漢代の鏡を模したものの背面にも他と同じく何等の磨滅もなく、傳世品とは認められないことを注意して、早く我が國に舶載された漢鏡は尊重され、引いて傳世の事實が考へられるが、三國の世となつて新たに影しい鏡が將來されるに及んで一般に普及すると共に、古墳にも副葬される様になりかゝる際にまた仿製が行はれ、茲に傳世品や新舶載の鏡が一樣に其の原型となつた爲に、右の鶴山例に見る如き結果が生じたのではないかとされてゐるのは、一の解釋として注意すべきであらう。かやうに古墳墓の精密な調査は其の數の少量なるにも拘らず彌す所は頗る甚大である。著者が不撓の熱意を以つて木事業を遂行されつゝあることは、古墳時代研究に基礎的の典據を缺く私共にも力強い希望を抱かしめるものと言はねばならない。(四六倍判、本文八四頁、圖版四六葉、日本古文化研究所發行、非賣品)(角田文衛)